

wager 類の補文主語に関する統語的分析

松本, 知子
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6790827>

出版情報 : 九大英文学. 48, pp.173-200, 2005. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :



wager 類の補文主語に関する統語的分析*

松本 知子

1. はじめに

本論文は、wager 類の不定詞補文の統語構造に焦点を当て、believe 類の不定詞補文との違いを踏まえながら、補文主語の統語的分析を行い、wager 類の不定詞補文が担う文法的特徴が説明できることを示す。

一般に、believe 類と wager 類の動詞について、次のように定義されている。

believe 類…思考・認識の意味を表す動詞

(例 : assume, believe, conceive, consider, expect, prove など)

wager 類…発話様態や発話内容を表す動詞¹

(例 : affirm, announce, allege, guarantee, declare, wager など)

次に、believe 類と wager 類の不定詞補文の共通点と相違点をまとめておく。

<共通点>

- (1) 不定詞補文は、[命題]を表す。それは、補文内容の真偽決定が可能であることからわかる。

a. John believed Peter to have played football, which was truth.

(Bošković 1997: 13)

b. Mary was announced to have left the room, which was true.

(Pesetsky 1991: 144)

- (2) 補文主語位置に PRO が生起できない。
- a. *John believed PRO to be crazy. (Bošković 1997: 9)
- b. *John announced PRO to have entered the room.
(Pesetsky 1991: 167)
- (3) 補文主語位置に虚辞の there が生起できる。²
- a. John believes there to be trouble in Congo. (Postal 1974: 39)
- b. He alleged there to be stolen documents in the drawer.
(ibid.: 304)
- (4) 補文主語位置に代名詞が生起できる。³
- a. John believed him to be crazy. (Bošković 1997: 9)
- b. Mary alleged him to have kissed Jane. (ibid.: 58)
- (5) 補文主語の受動化ができる。
- a. John was believed to be crazy. (Bošković 1997: 51)
- b. Peter was wagered to be crazy. (ibid.: 55)
- (6) 補文主語の wh 移動ができる。
- a. Who did Mary believe to be crazy? (ibid.: 49)
- b. Who did Peter wager to be crazy? (ibid.: 61)
- (7) 補文主語の重名詞句移動ができる。
- a. I believe __ to be intolerant [all those who disagree with my
fountain theory of language]. (Postal 1974: 405)
- b. They alleged __ to be pimps [all of the Parisians who the CIA had
hired in Nice]. (ibid.: 305)

<相違点>

- (8) **believe** 類の補文主語位置には語彙的な名詞句が生起できるが、**wager** 類の補文主語位置には語彙的な名詞句が生起できない。

a. I believe John to be a liar. (Amano 2000: 27)

b. *He alleged Melvin to be a pimp. (Postal 1974: 304)

以上のようなことから、一般に、**believe** 類の不定詞補文では、補文主語位置に語彙的な名詞句、代名詞、虚辞が生起できて、その受動化、**wh** 移動、重名詞句移動も可能である。一方、**wager** 類の不定詞補文では、補文主語位置に語彙的な名詞句は生起できないが、代名詞、虚辞は生起できる。そして、その受動化、**wh** 移動、重名詞句移動も許される。本稿では、このような一見特異な **wager** 類の不定詞補文の統語構造について、Chomsky(2000, 2001a,b)の提案する Phase の概念を使って説明が可能であることを示す。⁴

本稿は以下の構成である。第二章で、先行研究として、Amano(2000)、Bošković(1997)を挙げ、その問題点を指摘する。第三章では、**wager** 類と **believe** 類の動詞の意味の違いを統語構造に反映させ、その統語構造の違いから、補文主語位置に語彙的な名詞句が生起できるか否かの違いが生じることを説明する。第四章では、補文主語の **wh** 移動、受動化、重名詞句移動が可能であることと補文主語位置に代名詞と虚辞の **there** が生起できることを、第三章で挙げた **wager** 類の統語構造に照らし合わせて、うまく分析できることを示す。第五章で論をまとめる。

2. 先行研究

2. 1. Amano(2000)

Amano(2000)は、**wager** 類の補文主語の認可条件について、GB 理論の枠組みに基づいて議論を展開している。

Amano(2000)は、Authier(1991)の分析を基に、補文主語の繰り上げを想定し、その繰り上がる場所は、主節の動詞によって下位範疇化された空位置 (expletive position) であると分析している。**believe** 類の不定詞補文の場合、(9)に示すようにその着地点 (landing site) が存在するが、**wager** 類の

場合は、それがいないために、補文主語位置に語彙的な名詞句が生起できないと論じている。

(9) I believe [_{DP} John_i] [_{CP} _{ti} to be a liar].

(9)では、補文主語 John は、格の与えられない θ 標示される位置から格の与えられる位置へと移動する。この2つの動詞の違いを示す証拠として(10)の例を挙げている。

(10) a. I cannot believe it how nice everybody's been to me.

b. *She alleged it that her handbag was stolen.

(10a)の believe を使った例は文法的になっているが、その文法性の判断には揺れがある。その判断の揺れを認めた上で、(10b)の非文法性から、wager 類の動詞は空位置 (expletive position) を投射せず、wager 類の補文主語は繰り上がらないと結論付けている。

しかし、(10a)の文法性の判断に揺れがあることから、この説明は説得力を欠くばかりでなく、あらかじめ格の与えられる空位置 (expletive position) が用意されているといった D 構造を導入して説明している点も、Chomsky(1993)以降のミニマリスト・プログラムの観点からすると支持できない。また、Chomsky(2000,2001)の Agree 操作の観点からすると、目的語の DP は元位置で、主節の v によって目的格であることが決定されるので、このような GB 理論における統率の概念に基づいた説明は、現在のミニマリスト・プログラムの理論的進展が正しいとすると支持できない。

次に、Amano(2000)では、wager 類の補文主語が、wh 移動をすると、文法的になるという(11)の事実を説明するために、語彙的な名詞句と wh-trace の認可条件の違いを提示している。

(11)a. *He alleged Melvin to be a pimp.

b. Who did they allege _{ti} to be a pimp?

語彙的な名詞句は、実際に格標示されることでしか認可されないが、**wh-trace** は、**potential Case-marking** という弱い条件で認可されると分析している。その証拠として(12)のような例を挙げている。(12a)で、DP の **the time** は **inquire** により格標示されていないが、(12b)では **wh-trace** が格標示されている。

(12) a. *I inquired the time.

b. What_i do you want to inquire t_i ?

(11a)で、語彙的な名詞句の **Mary** は、実際に格標示される必要があるが、それができないために非文となっている。しかし、(11b)で、主動詞 **allege** は、**trace** を **potential** に **Case-mark** するので、認可されると分析している。

しかし、**I inquired his address.** が文法的であることから、**inquire** は格標示する能力があると考えられるため、(11)に関するこの説明も説得力を欠く。また、Chomsky(1993)以降のミニマリスト・プログラムでは、広く **wh** 移動はコピーを残す操作と考えられており、コピーは発音されないものの、**wh** 句と性質はかわらないので、語彙的な名詞句と **wh-trace** の認可条件に違いがあるとは考えられない。さらに、Chomsky(2000,2001)の **Agree** 操作の観点からすると、語彙的な名詞句と **wh** 句のコピーは、どちらも同じ **Agree** 操作により格が決定されるので、このように認可条件の違いを想定できない。

2. 2. Bošković(1997)

他の興味深い提案として Bošković(1997)の分析がある。Bošković(1997)は、Chomsky(1993, 1995)の枠組みで、初期のミニマリスト・プログラムを基に、**wager** 類と **believe** 類の不定詞補文について分析している。**wager** 類の不定詞補文と **believe** 類の不定詞補文の構造が違うことから、補文主語位置に語彙的な名詞句が生起できるか否かの違いがでてくると説明している。具体的には、(13)に示されているように、Bošković(1997)は、**wager** 類の動詞は動作主主語を持つ ‘**agentive verb**’ であるので、‘**null agentive V**’ を主要部とする **VagP** が上にあり、その下に **wager** などを主要部とする **VP** が

来ると仮定し、2つの VP shell の上に AgroP を持つ構造 (AgroP—VP—VP) を立てている。believe 類の不定詞補文については、agentive の VP shell がないので、AgroP—VP という構造が想定されている。

- (13)a. *John_i wagered_j [AgroP Peter_k t_j [VagP t_i' t_j [VP t_i t_j [IP t_k to be t_k crazy]]]].
 b. John_i believes_j [AgroP Peter_k t_j [VP t_i t_j [IP t_k to be t_k crazy]]].

その上で、Bošković(1997)は、(13a)が認可されないのは、Minimize Chain Links Principle (以下、MCLP)に違反するからであると分析している。⁵(13a)において、Peter は格認可のために AgroP の Spec に上がらなければならないが、その移動は、John の痕跡位置の2つの(t_i', t_i)を飛び越えることになり、MCLP に違反することになる。しかし、(13b)の場合、believe の Agro への移動により t_i と AgroP の Spec が等距離になることから、Peter の AgroP の Spec への移動が認可される。

しかしながら、この分析にはいくつかの問題がある。まず、Chomsky(1995)が主張しているように、通常 A 移動の痕跡は見えないとすると、John の痕跡 t_i は移動の妨げにならないと考えられる。また、この Agr を使った分析は、現在では支持されていない。なぜなら、Agr は照合のためだけに存在し、独立した根拠を持たないためである。Agr を導入せずにその趣旨を生かす分析として vP 分析がある。次節では、vP 分析や Agree 操作、Phase の概念をもって wager 類の補文構造について統一的に説明できる代案を検討することとする。

wager 類の補文主語位置に生起する there の連合要素 (associate) の認可について Bošković(1997)は、Lasnik(1995a)の be 動詞が部分格 (partitive Case) の付与子であるという分析を援用して、(14)の例を説明している。

- (14) He alleged there to be stolen documents in the drawer.

この分析では、連合要素(associate)の stolen documents は、主節の AgroP の Spec で格素性が照合できない。なぜなら、主節の AgroP の Spec への移

動は、(13a)と同様に MCLP 違反になるからである。よって、Lasnik(1995)の提案に従い、be が stolen documents に部分格(partitive Case)を付与すると分析される。

しかし、部分格(partitive Case)の存在を認めるなら、Chomsky(1993)で批判されているように、部分格(partitive Case)は there 構文においてのみ成り立つと記述しなければならないという問題が残る。次節では、部分格(partitive Case)を認めない立場に立った場合、どのような分析ができるのかを提案する。

次に、Bošković(1997)では、wager 類の補文主語の wh 移動に関して、Ura(1993)の分析を援用し、(15)の例を説明している。

(15) Who did John wager [_{ti} to be crazy]?

(15)で、wh 句が移動するとき、主節の AgroP に付加し、そこで格照合されるとしている。そして、AgroP に付加した位置は、 $\bar{A}$ 位置だから、MCLP に違反しないとされる。さらに、(16)のような構造を挙げ、語彙的な名詞句と wh 句の格照合に関する違いを述べている。

- (16) a. $wh_i \cdots [_{AgroP} t'_i [_{AgroP} Agr [_{VP} V t_i]]] \cdots$
 b. $wh_i \cdots [_{AgroP} [_{AgroP} t'_i Agr [_{VP} V t_i]]] \cdots$
 c. $\cdots [_{AgroP} NP_i [_{AgroP} Agr [_{VP} V t_i]]] \cdots$
 d. $\cdots [_{AgroP} [_{AgroP} NP_i Agr [_{VP} V t_i]]] \cdots$

(16a)の $wh_i t_i$ の連鎖で、wh 句は AgroP に付加した位置で格照合される。(16b)では、wh 句は、AgroP の Spec で格照合される。しかし、(16a,b)で、 $wh_i t_i$ の連鎖全体の長さは同じであるので、両方の派生が許される。他方、(16c)における $NP_i t_i$ の連鎖では、NP が AgroP に付加した位置で格照合される。それは、NP が AgroP の Spec で格照合される(16d)の $NP_i t_i$ の連鎖よりは長い。結果として、派生の経済性により(16d)の派生が選ばれる。よって、wh 句は AgroP に付加した位置で格照合され、語彙的な名詞句は、AgroP の

Spec で格照合されなければならない。しかし、実際、語彙的な名詞句は、(13a) で述べたように、MCLP 違反となるために、それが許されない。さらに、Bošković(1997)では、wager 類の補文主語の wh 移動に関して、Chomsky(1995)の Move F theory を採用し、wh 句の素性だけを Agro に移動させて格照合すると分析している。

しかしながら、wh 句の認可に関して、Agree 操作を用いて分析すると、wh 句の格は、*v* の探査領域(search domain)内で決定される。よって、wh 句の格照合のために素性だけを移動させるという分析は支持できない。さらに、wh 句の移動経路を考えると、A 位置 (IP Spec) から、 $\bar{A}$ 位置 (CP-Spec)、さらには、A 位置 (Ura(1993)の分析によると、LF では AgroP に付加した位置は A 位置として分析) への移動になるので、improper movement になるのではないかという問題が生じる。

本節の議論をふまえて、次節では、wager 類の補文構造と believe 類の補文構造の違いを説明できる代案を検討することとする。それを基に、補文主語の wh 移動、受動化、重名詞句移動ができること、そして、補文主語位置に代名詞と虚辞の *there* が生起できること、さらには、wager 類と類似したふるまいを持つフランス語の croire-class(ECM)の不定詞補文について分析する。

3. 代案

3. 1. 提案

本論文では、believe 類と wager 類の動詞の特徴を構造に反映させる案を提示する。まず、believe 類と wager 類の主語の θ 役割については次のように定義される。

- (17) believe 類は主語に経験者の θ 役割を付与するが、wager 類は主語に動作主の θ 役割を付与する。

このように、wager 類と believe 類の主語の θ 役割は違うが、wager 類も believe 類の不定詞補文も命題を表すことは共通である。wager 類の動詞は、

「断言する」「発表する」といった意味を持つものが多い。つまり、ある命題に対して、考えや思いを抱いた上で、伝達の発話行為を行うのである。よって、wager 類の不定詞補文においても、その命題の担い手、つまり、経験者が存在していると考えられる。もちろん、経験者も動作主も同一人物ということになる。そこで、Experiencer を *pro* と考え、Agent (動作主) > Experiencer (経験者) > Theme (命題) という階層関係を考慮に入れた構造が想定できる。(以下、Agent を Ag、Experiencer を Ex と表記する。)believe 類の補文構造については、(17)で述べたように、Agent (動作主)を取らないので、Experiencer (経験者) > Theme (命題) という階層関係が成り立つ。さらに、Chomsky(2000, 2001a,b)の提案する Phase の概念を取り入れた分析を提案する。まず、Chomsky(2001)と同様に、CP と transitive vP を phase と考える。また、次のような仮定に基づいて議論を展開する。

(18) Phase Impenetrability Condition/PIC

The domain of H is not accessible to operations at ZP, only H and the edge are accessible to such operations. (Chomsky 2001a, 14)

PIC により、phase の外の要素は、phase の head、または、Spec にある構成素にしかアクセスできないということがいえる。

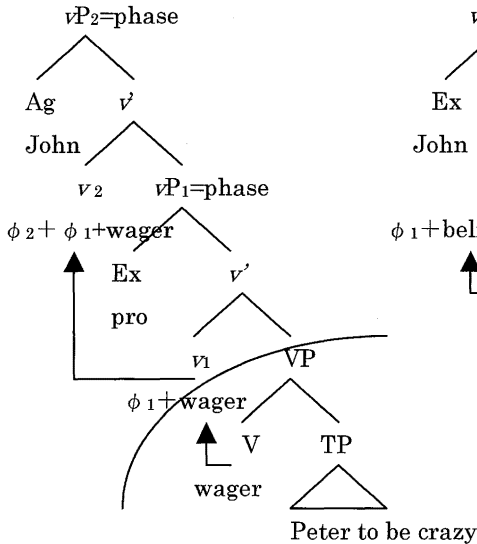
また、Bošković(1997)と同様に、VP shell 分析を採用する。以上のことをふまえ、(13)の例を基に、構造を提示する。

(19)a. *John wagered Peter to be crazy. (= (13a))

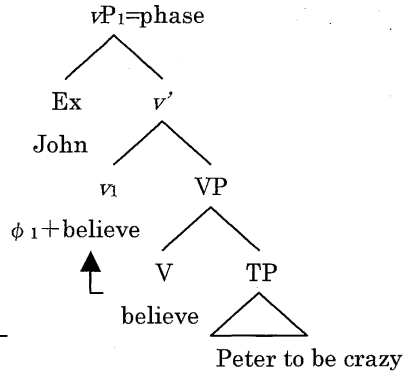
b. John believed Peter to be crazy. (= (13b))

(19)の補文構造を図示すると次のようになると考えられる。

(20)a. wager 類の補文構造



b. believe 類の補文構造



(20a)で、動詞 *wager* は、VP 内から移動して軽動詞 ϕ_1 に付加し、さらに ϕ_2 に付加する。 vP_1 は、外項として Experiencer を取る transitive vP であるので、phase となる。そして、Agent の主語 *John* は Spec- vP_2 に基底生成される。その vP_2 は、 vP_1 と同様に、transitive vP であるので、phase となる。よって、*wager* 類の補文構造では、phase が 2 つ存在することになる。

(20b)の *believe* 類の補文構造については、まず、動詞 *believe* は、VP 内から移動して軽動詞 ϕ_1 に付加し、 v_1 head を占める。 vP_1 は、外項として Experiencer を取る transitive vP であるので、phase となる。ここまでは、(20a)の *wager* 類の補文構造と同様である。*believe* 類の主語の θ 役割は Experiencer であり、Agent は取らないので、(20a)のような vP_2 の投射は存在しない。よって、*believe* 類の補文構造では、phase が 1 つしか存在しないことになる。

4. 分析

4. 1. 語彙的な名詞句の生起

(20a)の **wager** 類の補文構造において、語彙的な名詞句である **Peter** が補文主語として生起するためには、 v_2 と **Agree** 操作が行われなければならない。しかし、 vP_1 が **phase** であり、(18)の PIC によると、次の **phase** での計算に利用できるのは、**Spec- vP_1** にある要素か、 vP_1 の **head** にある要素のみである。従って、補部内にある **Peter** は、次の **phase** での計算に利用できないために、 v_2 と **Agree** 操作が行えないことになる。 v_2 と **Peter** が **Agree** 操作を行えないため、 v_2 の解釈不可能な ϕ 素性も **Peter** の解釈不可能な格素性も削除されないことになり、**Peter** が補文主語として生起できず、(19a)が非文法的であることが説明できる。

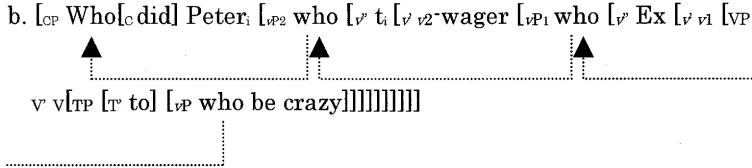
(20b)の **believe** 類の補文構造においては、一つの **phase** 内に v_1 と **Peter** があるため、PIC は適用されず、**Agree** 操作が適切に行われることになる。**Agree** 操作により、 v_1 の解釈不可能な ϕ 素性も **Peter** の解釈不可能な格素性も削除され、**Peter** に目的格の値が与えられ、補文主語として生起できる。よって、(19b)が認可されることが説明できる。以上のように、**wager** 類と **believe** 類の意味の違いを(20a,b)のような構造に反映させることで、(19)の文法性の違いが説明できる。

4. 2. 補文主語の **wh** 移動

(6b)に示した **wager** 類の補文主語の **wh** 移動ができることが、(20a)の構造を基に説明できることを示す。まず、**wh** 句は主節の **Spec-CP** まで上がらなければ認可されない。この点に関して、Chomsky(2001: 34)は、「意味的な効果が生じる場合には、EPP 素性が **Phase** の主要部には随意的に付与できる」という趣旨の提案を行っている。EPP 素性により、**wh** 句は **spec- vP** を連続循環的に移動して主節の **Spec-CP** にたどり着くことができる。**wh** 句の格については、**Spec- vP** を経由する段階で、照合される。なぜなら、**wh** 句は **wager** 類の動詞の探索領域 (search domain) 内に入り、**Agree** 操作が適切に行われるからである。(21a)を例にとると、これは、(21b)のように表される。ここでは、Chomsky(2000)の「**head** は多重指定部を持ちうる」という想定に

基づいて分析している。 vP_1 の inner spec は、Experiencer になり、outer spec の who が v_1 の EPP 素性を削除する。同様に、 vP_2 では、inner spec が主語 t_i になり、outer spec の who が v_2 の EPP 素性を削除する。そして、最終的に、who は、Spec-CP にたどり着く。

(21)a. Who did Peter wager to be crazy? (= (6b))

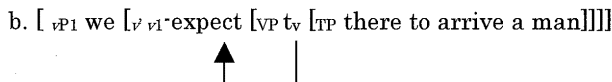


以上のことから、(20a)の構造を用いて、wager 類の補文主語の wh 移動ができることをうまく説明できる。

4. 3. 虚辞 there の生起

wager 類の補文主語位置に虚辞の there が生起できることについて、(20a)の構造を用いて説明できることを示す。虚辞の there は、stress が置かれることはなく、語彙的な名詞句とは違い、弱形であると考えられます。それで、wager 類の補文主語位置に生起できることから、Amano(2000)、Bošković(1997)の分析と同様に、虚辞の there は接語と分析できる。よって、虚辞の there は V に編入すると考えられる。しかし、ここで問題になるのが、wager 類の不定詞補文において、補文主語位置に生起する there の連合要素 (associate)の格はどのようにして認可されるのかということである。believe 類の不定詞補文の場合は、 v_1 の探査領域 (search domain) 内に連合要素 (associate)が存在するので、Chomsky(2001a)の分析に従って、(20b)の構造を基に考えると、次のように Agree 操作が行われると考えられる。

(22) a. We expect there to arrive a man.



v_1 と *there* との間には、*phase* が存在しないために、PIC の違反はなく、*Agree* 操作が適切に行われる。そして、 v_1 と *there* との *Agree* 操作により、*there* の持つ解釈不可能な人称素性が削除される。さらに、 v_1 と *a man* との間でも *Agree* 操作が適切に行われる。なぜなら、 v_1 と *there* と同様に、 v_1 と *a man* との間には *phase* が存在しないために、PIC の適用を受けないからである。 v_1 と *a man* との *Agree* 操作により、 v_1 の解釈不可能な ϕ 素性が削除される。そして、*a man* に目的格の値が与えられる。一方、*wager* 類の不定詞補文の場合、*vP* 内の構造は、(23b) のようになると考えられる。

(23) a. He alleged there to be stolen documents in the drawer. (= (3b))

b. [_{VP2} he [_V v_2 -allege-*there*_i [_{VP1} Ex [_V v_1 t_v [_{VP} [_V t_v [_{TP} t_i to be

 stolen documents in the drawer]]]]]]]]

(23b)において、 vP_1 と vP_2 はそれぞれ外項を伴っており、transitive *vP* であるので、*phase* となる。(23b)の構造で考えると、*there* は元々 vP_1 の補部内にあるので、PICにより v_2 と *Agree* 操作ができないが、*there* は接語と分析されるので、*V* に編入し、 v_2 と *there* との間で *Agree* 操作が適切に行われると考えられる。しかし、 v_2 と連合要素(associate)の *stolen documents* との間では *Agree* 操作が行われない。なぜなら、連合要素(associate)は、*phase* である vP_1 の補部内にあり、PICにより、次の *phase* である vP_2 の head にある v_2 からアクセスできないからである。このままでは、連合要素(associate)が認可されないままになってしまう。しかし、(23a)は文法的であるので、連合要素(associate)が認可される方法を検討せねばならない。連合要素(associate)の認可の方法として、2つの可能性が考えられる。一つは、前述のように、Lasnik(1995a)、Bošković(1997)の分析に沿って、*be* 動詞が部分格を与えるという方法である。

二つめの可能性として、虚辞の *there* を Simpson(2000)の partial *wh movement* 分析における *wh* 虚辞の役割と同様に考えることが挙げられる。Simpson(2000)では、(24)のようなヒンディ語の partial *wh movement* の例

を基に wh 虚辞について説明している。

- (24) [CP₁ raam·ne kyaa socaa [CP₂ ki kOnsaa aadmii ravii·ne kahaa
Ram-ERG WH thought that which man Ravi-ERG said
[CP₃ ki ti aayaathaal]]?
that came
'Which man did Ram think that Ravi said came?'

(Simpson 2000: 191)

wh 虚辞の *kyaa* 'WH' は + Q Comp にあるが、疑問の意味は表さない。疑問の意味を表すのは、下にある wh 句 *kOnsaa aadmii* 'which man' である。主節の C を +wh, +Q にするために、*kOnsaa aadmii* 'which man' は spell-out 前に中間の節に移動すると考えられる。従って、wh 虚辞の挿入により CP₂ から CP₁ まで照合領域(checking domain)が拡張して、wh 素性の照合がなされ、wh 疑問文として解釈される。Simpson(2000)では、ハンガリー語やドイツ語などにおいても、wh 虚辞に anti-locality effect があるということを説明している。

英語における虚辞の *there* は、Partial wh movement 分析における wh 虚辞と同様の機能を持つと考えられる。そうすると、*there* が生起することで、探査領域(search domain)が拡張し、PIC に従わず、*v*₂ と連合要素(associate)の間での Agree 操作が成立するとすると、(23a)が文法的であることが説明できる。

4. 4. 代名詞の生起

(4b)に挙げたように、代名詞は *wager* 類の補文主語位置に生起できる。このことに関して、Amano(2000)、Bošković(1997)と同様に、*wager* 類の補文主語位置に生起する代名詞は接語であるからと分析できる。そのように分析できるのは、第一に、次に挙げる Kayne(1994)のフランス語の接語が等位構造化されないという事実による。

(25) *Je le et la vois souvent.

I him and her see often

‘ I often see him and her’

(Kayne 1994: 59)

この事実を **wager** 類の補文主語位置に生起する代名詞に照らし合わせてみると、(26a)に示すように、**wager** 類の補文主語位置には、**him and her** のような等位構造化された要素は生起できないが、(26b)の **believe** 類の補文主語位置には、それが認可される。

(26) a. *Mary alleged him and her to have kissed Jane.

b. The police proved him and her to be addicts.

よって、**him and her** のような等位構造化された要素は **wager** 類の補文主語位置に生起できないが、**him**、**her** といった等位構造化されない要素は生起できることから、接語であると分析できる。

2 番目に、**wager** 類の補文主語位置に生起する代名詞が接語である証拠として、(27)のような代名詞の縮約形の例が認可されることが挙げられる。

(27) Mary alleged ‘em to have kissed Jane.

(27)の **wager** 類の補文主語として、**them** の縮約形の **‘em** が生起できることから、その補文主語が接語であるといえる。

以上、接語化に関する2つの事実により、**wager** 類の補文主語位置に生起する代名詞は、接語であると分析できる。

wager 類の補文主語位置に代名詞が生起できることは、(20a)の構造を基に、前節の虚辞 **there** の生起と同様に説明できる。(4b)の例を構造に表すと次のようになる。

(28) a. Mary alleged him to have kissed Jane. (= (4b))

b. [_{VP2} Mary [_{v'v2}-allege-him_i [_{VP1} Ex [_{v'v1} t_v [_{VP} [_v t_v [_{TP} t_i to have kissed Jane]]]]]]]

(28b)において、 vP_1 と vP_2 はそれぞれ外項を伴っており、transitive vP であるので、phase となる。(28b)の構造で考えると、him は元々 vP_1 の補部内にあるので、PIC により v_2 と Agree 操作ができないが、him は接語と分析されるので、V に編入し、 v_2 と him との間で Agree 操作が適切に行われると考えられる。よって、代名詞が接語として **wager** 類の補文主語位置に生起する事実を、(20a)の構造に照らし合わせて考えることができる。

4. 5. 補文主語の受動化

(5b)のように **wager** 類の補文主語が受動化できることについても、(20a)の構造を基に説明できる。(5b)の構造は次のようになると考えられる。

(29) a. Peter was wagered to be crazy. (= (5b))

b. [_{TP} John_i [_T was] [_{VP2} [_{v'v2}-wagered [_{VP1} [_{v'v1} t_v [_{VP} [_v t_v [_{TP} t_i to be crazy]]]]]]]]

T には[EPP]と解釈不可能な ϕ 素性があり、探査要素になり、その目標要素になるのは、Peter である。(20a)では、phase が2つ存在していたが、(29a)は、受身文なので、 vP_1 、 vP_2 共に外項を投射せず、phase とはならない。よって、PIC の適用を受けることはないの、T と Peter との間に Agree 操作が成立する。探査要素 T の ϕ 素性によって目標要素 Peter の解釈不可能な格素性が削除され、[EPP]によって繰り上がると考えられる。以上のことから、(20)で挙げたような phase が受動文には存在しないので、T と Peter の間で Agree 操作が適切に行われ、**wager** 類における補文主語の受動化が可能であることが説明できる。

4. 6. 補文主語の重名詞句移動

残された問題として、(7b)で述べた、wager 類の補文主語の重名詞句移動ができることが挙げられる。重名詞句移動については、鈴木(1995)で挙げられたような右方移動分析と Kayne(1994, 1998)で挙げられたような左方移動分析がある。(20a)で提案した wager 類の補文構造にあてはめて考えることで、右方移動分析でも左方移動分析でも wager 類の補文主語の重名詞句移動が許されることが説明できる。

まず、鈴木(1995)で挙げられた右方移動分析について述べる。鈴木(1995)は、次の(30)の believe 類の例で、重名詞句の移動付加先は、主文 VP 右側付加の位置と分析している。

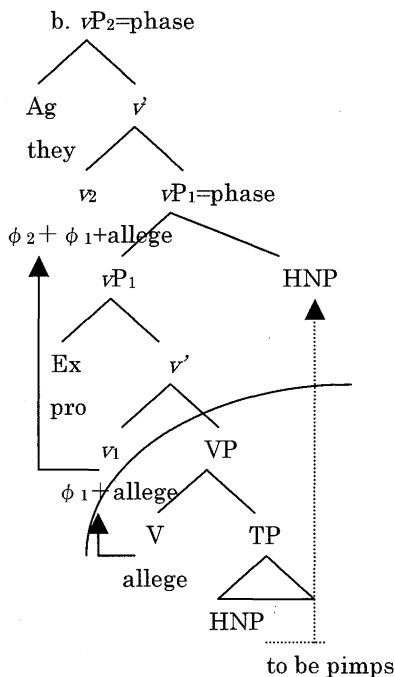
- (30) I believe t_i to be a nice guy [my favorite stepfather from London]_i.
(鈴木 1995: 68)

その証拠として、(31)のように、重名詞句が主文副詞類を越えて転移している例を挙げている。

- (31) I'll consider [t_i to be fools] in the weeks [all those who drop this course]_i.
(西原 1993: 125)

以上のような鈴木(1995)の VP 付加の分析を基に、wager 類の補文主語の重名詞句移動ができることについて分析する。(20a)の構造において、Spec-TP にあると考えられる重名詞句は、顕在的に、 vP_1 の右側付加の位置に移動すると考えられる。(7b)の例を(32a)に挙げる。また、その構造は、(32b)のようになる。(ここで、重名詞句を HNP と記す。)

- (32)a. They alleged__ to be pimps [all of the Parisians who the CIA had hired in Nice]. (= (7b)) (Postal 1974: 305)



(32b)の構造において、重名詞句は、まず、 vP_1 の補部内にあるが、 vP_1 の右側付加位置に顕在的に移動する。そして、PICに違反することなく、 v_2 の探査領域(search domain)内に入り、 v_2 と重名詞句との間で、Agree関係が結ばれる。そこで、 v_2 の解釈不可能な ϕ 素性が削除され、重名詞句に目的格の値が与えられる。よって、wager類の補文主語の重名詞句移動の右方移動分析を、(20a)の構造を基に説明できる。

次に、Kayne(1994,1998)に代表される重名詞句の左方移動について検討する。Kayne(1994,1998)では、右方付加を全面的に禁じる「線形対応の公理」(Linear Correspondence Axiom; LCA)に基づいた重名詞句の左方移動分析をしている。この分析では、重名詞句が左方移動し、残りのVPがその上に

移動するというものである。そのことを(33a)の例を基に説明している。
(33b)はその派生を示す。

(33) a. ?She has been requesting that he return ever since last Tuesday
[the book that John borrowed from her just last year].

b. …requesting that he return the book that J borrowed …ever since
last Tuesday. → (heavy NP preposing)

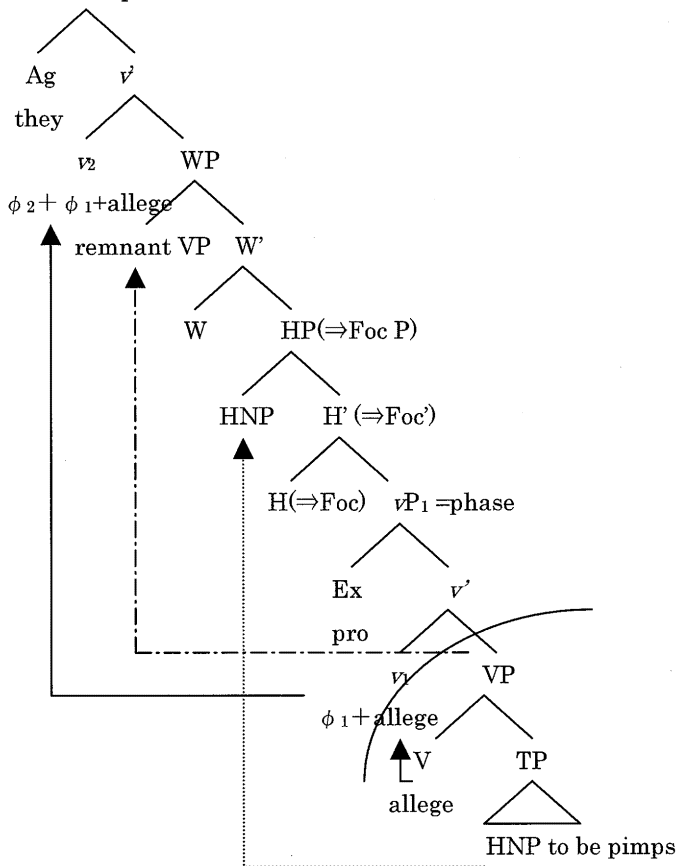
…the book that J borrowed …_i H⁰ requesting that he return t_i ever
since last Tuesday. (raising of H⁰ to W and VP-preposing)

…[requesting that he return t_i ever since last Tuesday]_k H⁰_i +W the
book that J borrowed…_it_j t_k

(Kayne 1998: 167)

Kayne(1998)は、(33a)において、John が he に束縛され、Condition C 違反になると予測されるが、それが回避されているのは、重名詞句が左方移動しているからであると分析している。重名詞句が左方移動する場所は、“heavy”を意味する HP の Spec であると論じている。そして、その主要部 H は、さらに上位の機能範疇 W に付加し、WP の Spec に残りの VP が移動すると分析している。このように考えれば、he が John を束縛することなく、Condition C 違反がないことがうまく捉えられる。では、この重名詞句の左方移動分析を(20a)の wager 類の補文構造にあてはめて考えられるのか検討する。右方移動分析と同様に、(32a)の例を用いて説明する。その構造は、(34)のようになると考えられる。

(34) $vP_2 = \text{phase}$



Kayne(1994,1998)と同様に、重名詞句は、Spec-HP に移動すると考えられる。そして、残りの VP が Spec-WP に移動し、語順も保障される。重名詞句は、 v_2 の探索領域 (search domain) 内に入るので、 v_2 と重名詞句との間で、Agree 操作が適切に行われる。それで、 v_2 の解釈不可能な ϕ 素性が削除され、重名詞句に目的格の値が与えられる。以上のことから、wager 類の補文主語の重名詞句移動の左方移動分析を(20a)の構造を用いて説明できる。

ここで、Postal(1974)、長谷川 (2003) の分析を踏まえて検討すべき事柄がある。それは、(8b)で述べたように、wager 類の補文主語位置に通常の音

調で発音した語彙的な名詞句は生起できないが、その語彙的な名詞句が焦点となれば、容認されるということである。(35)がその例である。

(35) He alleged MELVIN to be a pimp. (Postal 1974: 305)

(35)のように、補文主語位置にある語彙的な名詞句に焦点が置かれると認可されることと、補文主語の重名詞句移動ができることは、(35)の語彙的な名詞句も重名詞句も焦点と考えられるという共通点をふまえることで説明できる。よって、(34)に示すように、Focus marker(Foc)が存在し、その Foc-head が解釈不可能な Focus feature を持つために、それを削除しようと、焦点が置かれた語彙的な名詞句は、Spec-FocP に頭在的に移動し、 v_2 との Agree 操作が適切に行われる。そして、重名詞句と同様に、焦点が置かれた語彙的な名詞句に目的格の値が与えられ、(35)の文法性が説明できる。

4. 7. フランス語の croire-class の不定詞補文

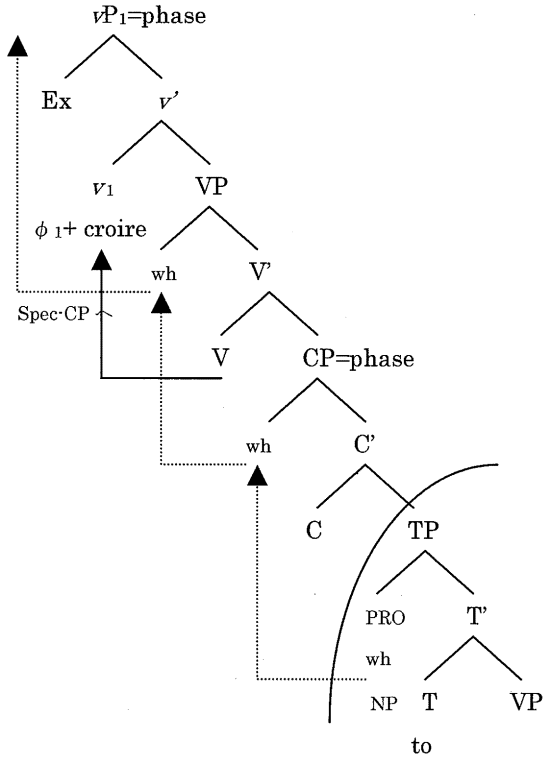
フランス語の croire-class(ECM)の不定詞補文についても、(20b)の構造と同様の構造を立てることにより、事実を適格に捉えることができる。フランス語の croire-class の不定詞補文は、Bošković(1997)と同様に CP であると考えられる。なぜなら、Bošković(1997)で述べられているように、CP と捉えることで、(36a)のように、補文主語位置に語彙的な名詞句が生起できないことと、(36b)のように、補文主語の受動化ができないことを説明できるからである。

- (36)a. *Pierre a cru Marie avoir acheté des fraises
 Pierre has believed Marie to-have bought some strawberries.
 b. *Pierre_i a été cru [t_i avoir acheté des fraises]
 Pierre has been believed to-have bought some strawberries.

よって、フランス語の croire-class の不定詞補文と英語の believe 類の不定詞補文の違いは、不定詞補文が CP を取るか、TP を取るかということである。

英語の **believe** 類の不定詞補文は、**TP** を取ることにより、補文主語の受動化も認可されるし、補文主語位置に語彙的な名詞句も生起できることが説明できる。さらに、**T⁰** の **to** が、**null Case** を付与する能力があるかないかという違いもある。フランス語の **croire-class** の不定詞補文の場合は、**to** が **null Case** を付与する能力があり、英語の **believe** 類の不定詞補文の場合は、**to** が **null Case** を付与する能力がない。この分析と、(20b)の構造を基に考えられる(37)のフランス語の **croire-class** の不定詞補文の構造から、フランス語の **croire-class** の特徴が捉えられる。

(37) フランス語の **croire-class** の補文構造



(37)では、**CP** と、**Experiencer** を外項に取る **vP1** が **phase** である。**V** は、軽

動詞 ϕ_1 に付加する。(37)から、to が null Case を付与するかしないかに関わらず、語彙的な名詞句が補文主語位置に生起できないことが説明できる。それは、語彙的な名詞句は、phase である CP の補部内にあり、PIC により、次の phase の head にある v_1 と Agree 操作が行えないからである。また、フランス語の croire-class の不定詞補文においては、(38)に示すように、補文主語の重名詞句移動が認可されない。

- (38) *Je crie t_i être intelligent – [l’homme que j’ai rencontré dans
 I believe to be intelligent the man that I met in the
 l’ascenseur]_i.
 elevator (Postal 1993: 353)

(38)が認可されないのは、重名詞句移動の基本的性質からいえることである。重名詞句移動は、wh 移動とは違って、節を越えられず、また、Spec-CP を避難口(escape hatch)として用いることはできないために、認可されない。その例として、(39b)のような例が挙げられる。(39a)は、wh 移動の例である。

- (39) a. Who do you think [_{CP} t' that John loves t]?
 b. *[_{CP} t' That he has sent t to his mother] is obvious [every letter he
 has ever received]. (平田 1995: 76)

(39a)の wh 移動の例では、who が Spec-CP を避難口(escape hatch)として、節を越えて移動ができています。しかし、(39b)では、(39a)と同様に、重名詞句に節を越えて移動が適用されているのに、非文法的になっている。よって、重名詞句移動は Spec-CP を避難口(escape hatch)として用いることができないといえる。

このことは、英語における want 類の補文主語の重名詞句移動ができないことから確かめられる。(40)にその例を挙げる。

- (40) *I don't want to be elected to high office—those men who have
committed war crimes. (Postal 1974: 407)

want 類の不定詞補文もフランス語の croire-class と同様に、CP を取る。そして、重名詞句は、節 (CP) を越えて移動できないために認可されないと説明できる。

次に、(41)は、フランス語の croire-class の不定詞で、補文主語位置に PRO が生起している例である。

- (41) Pierre croit [PRO avoir convaincu son auditoire]
Pierre believes to-have convinced his audience
(Bošković 1997: 63)

フランス語の croire-class の不定詞補文において、PRO が生起できるのは、T が[+tense]であり、to が null Case を付与しているからと考えられる。しかし、to が常に null Case を付与すると考えると、(42)に挙げるような、wh 移動が認可できることを説明できない。

- (42) Quii Pierre croit-il [t_i avoir achete des fraises]
Who Pierre believes he to-have bought some strawberries
(ibid.: 66)

(42)が認可されるのは、to が[-tense]であり、null Case を付与していないからと考えられる。null Case を付与しないなら、T により補文主語に格が与えられることはない。それで、croire-class の wh 句は、wager 類や believe 類の wh 句と同様に、v との Agree 操作により認可されるといえる。この場合も、T⁰、C⁰、V⁰ の EPP 素性によって、連続循環的にそれぞれの Spec を経由して、主節の Spec CP にたどり着くことによって、補文主語の wh 句が v との Agree 操作を行う。その過程で wh 句は、v との Agree 関係が築かれ、wh 句に目的格の値が与えられる。

ここで、フランス語の *croire*-class の不定詞補文が、英語のコントロール補文と同様に CP を取ることから、その違いが問題となるかもしれない。次の(43)に見られるように、英語のコントロール構文の補文主語は、(42)と違い、wh 移動ができない。

(43) *Who_i did you try [_{CP} [_{IP} t_i to win]]? (Ura 1993: 270)

(43)で、wh 移動ができないのは、コントロール動詞(try)には格付与能力がないために、動詞と wh 句との Agree 関係が成り立たないためであると考えられる。よって、フランス語の *croire*-class の動詞とコントロール補文の動詞との違いは、格付与能力があるかないかということである。⁶

5. まとめ

本論文では、wager 類の不定詞補文の統語構造に焦点を当て、believe 類の不定詞補文との違いを踏まえながら、補文主語の統語的分析を行った。具体的には、wager 類と believe 類の動詞の特性を構造に反映させ、Phase の概念を取り入れて、分析を行った。この結果として、wager 類の不定詞補文が担う文法的特徴が説明されたと考えられる。

このことは、wager 類において、2段階の vp shell の存在を認める可能性が妥当であることを示すとともに、Chomsky(2000,2001)の Agree と PIC に基づく素性照合のメカニズムに対する支持となったともいえる。

註

* 本論文の作成にあたっては、西岡宣明先生から、示唆に富むたいへん有益なご指摘をいただいた。特記して感謝の意を表したい。言うまでもなく、本稿の内容や例文に関する不備はすべて筆者の責任である。

1. wager 類という名称は、Pesetsky(1991)によるものである。wager 類の動詞の分類は明確なものとはいえない。例として、Postal(1974)では、assume を wager 類として分析している。また、Postal(1974)では、acknowledge を wager 類として扱っ

ているが、Pesetsky(1991)では、acknowledge を wager 類として扱っていない。本論文では、allege や wager といった wager 類の代表的な動詞を用いて議論することとする。

2. 虚辞の there と同様に、虚辞の it も believe 類と wager 類の補文主語位置に生起可能である。believe 類の例として、This letter proves it to be useless to talk to Bob. (Postal 1974: 19)が挙げられ、wager 類の例として、He guaranteed it to be untrue that this client was a werewolf. (Postal 1993: 361)が挙げられる。
3. Bošković(1997)、Amano(2000)は、wager 類の補文主語位置に代名詞が生起できると分析しているが、Postal(1974)は、代名詞でも虚辞でない場合は補文主語位置に生起できないとしている。長谷川(2003)は、Postal(1974)の分析に従い、*John wagered/alleged them (=the stolen documents) to be in the drawer.を認可されないものとして分析している。
4. Phase とは、「命題」を構成する単位（統語構成物）であり、一般に、transitive vP と CP が Phase であるとされる。 v と C が Phase の主要部、Spec- vP と Spec-CP がその edge であるとされる。（詳しい定義については、Chomsky(1998,2001a)を参照）
5. Bošković(1997)では、Minimize Chain Links Principle の明示的な定義を与えていないが、Chomsky(1995: 295)では、Minimal Link Condition を次のように定義している。

Minimal Link Condition(MLC)

At a given stage of derivation, a longer link from α to K cannot be formed if there is a shorter legitimate link from β to K.

6. I tried a new way.といった文で使われる try は、格付与能力がある。しかし、この try はコントロール動詞ではない。

参考文献

- Amano, Masachiyo. (2000). "On Licensing Conditions on Subjects of Infinitival Clauses", *Linguistic and Philosophy* 19, 21-40.
- Authier, J-Marc. (1991). V-governed expletives, Case theory, and the projection

- principle. *Linguistic Inquiry* 22, 721-740.
- Bošković, Željko. (1997). *The Syntax of Nonfinite Complementation: An Economy Approach*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, N. (1993). A Minimalist program for linguistic theory. In *The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, edited by K. Hale and S.J. Keyser, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (2000). "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 98-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, N. (2001a). "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by M. Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, N. (2001b). "Beyond Explanatory Adequacy," MIT occasional papers in linguistics 20. Cambridge, MA: MIT.
- 長谷川欣佑.(2003). 『生成文法の方法—英語統語論のしくみ—』研究社, 東京.
- 平田一郎 .(1995). 「照合理論と右方移動」高見健一(編)『日英語の右方移動構文: その構造と機能』, 37-53, ひつじ書房, 東京.
- Kayne, Richard S. (1994). *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press
- Kayne, Richard S. (1998). Overt vs covert movement. *Syntax* 1: 128-191.
- 柴原和生・松山哲也.(2001). 『補文構造』(英語学モノグラフシリーズ4) 研究社, 東京.
- Lasnik, H. (1995a). Case and expletives revisited: On Greed and other human failings. *Linguistic Inquiry* 26, 615-633.
- 西原俊明.(1993). 「右方移動現象と束縛経路理論の問題点」福岡言語学会編『言語学からの眺望』115-127, 福岡:九州大学出版会.
- Pesetsky, David. (1991). *Zero Syntax*, Vol. 2, ms., MIT, Cambridge, MA.
- Postal, Paul M. (1974). *On Raising*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Postal, Paul M. (1993). "Some Defective Paradigms," *Linguistic Inquiry* 24, 347-364

- Simpson, A. (2000). *Wh-movement and the theory of feature-checking*, John Benjamins, Amsterdam.
- 鈴木右文(1995)「英語の右方移動の統語論」高見健一(編)『日英語の右方移動構文：その構造と機能』, 37-53, ひつじ書房, 東京.
- Ura, H. (1993). On feature-checking for wh-traces. In *MIT working papers in linguistics 18: Papers on Case and agreement I*, edited by J.D. Bobaljik and C. Phillips, 243-280. MITWPL, Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Mass.